

研究論文

インバウンド観光に対応する観光教育についての考察

—和歌山県における児童生徒による観光ガイド活動の事例を通して—

**A study on tourism education dealing with problems concerning inbound tourism:
The case of pupils' tourism guide activity in Wakayama Prefecture**

森 さえか

Saeka Mori

和歌山県庁

キーワード：児童生徒、観光ガイド、英語コミュニケーション能力、観光教育、異文化理解

Key Words : pupils, tourism guide, English communication ability, tourism education, cross-cultural understanding

Abstract :

The number of foreign tourists has been increasing, but Japanese people do not seem to have the proper ability and attitude to accept the presence of foreign tourists. The Japanese people — especially tourism industry employees — need to deepen their understanding of other cultures and enhance their English communication ability.

Previous researches have suggested that tourism guide activities enabled pupils to enhance their communication ability. Therefore, the researcher hypothesized that pupils' tourism guide in English would enhance their English communication ability and they would be able to gain a deeper understanding of different cultures through interaction with English-speaking guests. The pupils are hosts and possible future tourism industry employees, so enhancing their English communication ability and deepening their understanding of other cultures would likely lead to improving the intangible problems concerning Japanese people and visiting tourists.

The research objective was lessons to develop English junior tourism guides at Mihama town, Wakayama prefecture. The researcher interviewed two lecturers and administered questionnaires to participants who were pupils between fifth-grade elementary school and third-grade high school. This research found that although participants did not deepen their understanding of other cultures, their English communication ability was improving.

I. はじめに

1. 研究の背景

2003年のビジットジャパンキャンペーン開始以降、日本を訪れる外国人観光客は順調に増加している。2003年の外国人観光客数は521万人であったが、2018年には過去最高の2,869万人を記録した（日本政府観光局（JNTO）2019）。政府は2016年、外国人観光客を2030年に6,000万人誘致する目標を立てた（明日の日本を支える観光ビジョン構想会議2016）。政府が観光振興に力を入れている一方で、住民に外国人観光客を受け入れる能力や態度が十分備わっていないようである。2016年度に観光庁が実施した外国人観光客を対象としたアンケートによると、「旅行中に困ったこと」で最も多く挙げられたのが「施設等のスタッフとのコミュニケーションがとれない」であった（観光庁2017）。また、住民には外国人観光客のマナーを批判する傾向が見られる（アトキンソン

2017）。

大屋（2016）は単一社会かつ閉鎖的なムラ社会に育った日本人は、グローバル化が進展する今日においても、ウチとソトの区別を明確に意識し、外部者に対して閉鎖的と指摘する。外国人観光客のマナーを批判する傾向も、このような性質が関係していると推測される。また、東（2016）は外国で自国の生活習慣に基づいて行動すると、故意でなくマナーに反することがあるとし、「世界各地からの旅行者を対象とする場合、ことばや文化・習慣あるいは宗教的な点などに関連して配慮すべき点について、異なる文化背景に関する知識を深め、異文化への意識を高めることが必要」（p.203）と述べている。したがって、外国人観光客を受け入れるうえで、住民には外国人とのコミュニケーションに対する開放的な態度や異文化に対する理解が、とりわけ観光事業¹従事者には英語コミュニケーション能力の向上が求められているといえる。

そもそも観光事業従事者の育成は観光教育が担ってきた。観光教育は大学を始めとする高等教育機関を中心に行われてきたが、世界的な観光の拡大とともに、裾野が広がり始める。日本においても2008年の観光庁設置を契機に、政府が児童生徒²を対象とした観光教育の普及への取り組みを開始する。こうした動きに伴い、児童生徒を対象とする観光教育についての研究も徐々に見られるようになってきた。本稿では、児童生徒を対象とする観光教育に着目し、インバウンド観光で見られる問題の改善に繋がるのではないかと考えるのもと、児童生徒の英語コミュニケーション能力の向上や異文化理解を深めることについて考察する。

2. 研究の目的と意義

本稿は児童生徒を対象とした観光教育において、外国人観光客を受け入れるために必要とされる能力や態度を養うことについて考察するものである。児童生徒は将来の観光事業従事者となるかもしれない存在であることから、彼らが観光教育を通して英語コミュニケーション能力を向上させることができれば、外国人観光客が観光事業従事者とコミュニケーションがとれないという問題の改善に繋がると期待される。また児童生徒は一住民でもあり、観光教育を通じて異文化理解を深めることで、外国人観光客を受け入れるうえで住民に必要とされる態度を形成することができると考えられる。

Ⅱ. 先行研究のレビューと本研究の位置づけ

1. 観光教育の定義

安村(2010, p.148)は次のように定義している。

観光教育(tourism education)とは、学校・社会教育などを通じて、観光に関する「知識」を広く普及させる活動である。その目的は、観光のあらゆる側面について人びとの理解を深め、観光に関する正負の効果を含み本質を熟知した、あらゆる観光関係者の育成をめざすことにある。

あらゆる観光関係者とはゲスト(観光者³)、ブローカー(観光産業や観光行政機関等)、ホスト(観光地住民)を指す。持続可能な観光を実現するために、こうした観光関係者が観光の本質と現実を正確に理解する必要があるとする。

2. 観光教育の拡大

観光教育の対象はブローカー(観光産業や観光行政機関等)、ゲスト(観光者)、ホスト(観光地住民)の順に拡大している。観光教育は1960年代から欧米の高等教育機関において、職業教育に特化した教育体系として発展を開始した(山田 2016)。先進諸国でマストツーリズムが拡大し、観光関連産業に有為な人材が求められるようになったためである(安村 2001; 山田 前掲書)。1980年代以降は観光地における環

境破壊、文化変容といったマストツーリズムがもたらす負の影響が認識されるようになり、持続可能な発展を支えるための観光教育が議論されはじめる(安村 前掲書)。「ゲスト」の観光教育が注目を集め、これは観光の本質を理解し自らの与える影響を認識した「よい」観光者の育成を目的としている(安村 前掲書)。更には「ホスト」である観光地住民が主体となって観光開発を実践するようになると、観光開発に関する知識や技法を習得させるため、観光地住民を対象とする観光教育が課題となっている(安村 前掲書)。

上述のようにマストツーリズム全盛期の観光教育は職業教育志向が強かった。1980年代になると、実務教育に加えて、理論教育の必要性が指摘されはじめた(Jafari & Ritchie, 1981; 安村 前掲書)。

Go(2005)はJafari & Ritchie(1981)が観光教育の焦点を実務重視から学術重視へと変化させたとしている。

(原文: The rationality phase of tourism education was heralded by a coedited review by Jafari and Ritchie (1981) of the state of the art of the rapidly expanding field of tourism education. It shifted the focus of tourism education from the pragmatic to the academic level. pp.485-486)

1990年代に入るとサービス経済化の進展や情報技術の飛躍の発展によって、人々の観光欲求が高まり、地球レベルでの空間的な移動と異文化交流が促進された(山田 2016)。観光の広がりや成長が既存の観光形態を多様化させ、観光諸現象のより広く深い認識が求められるようになる(山田 前掲書)。こうした変化に伴い、観光以外の伝統的な専門領域の研究者にも観光に対する関心が広がった(山田 前掲書)。イギリスをはじめとするヨーロッパにおいて、社会学や文化人類学などの分野を中心に、理論的・方法論的研究が増加する(山田 前掲書)。山田(前掲書, p.19)は「90年代は職業重視型教育に加えた学術重視型教育への始動期である」と述べている。

また1990年代に観光教育はその裾野を拡大させる。高等教育機関を中心に行われていたが、イギリスにおいて16歳までの義務教育など、より早い段階から「観光」が一教科として教えられるようになった(Airey, 2005)。

(原文: The second important shift from about 1990 is the appearance of tourism as a distinct subject of study at lower levels, in what in the UK is referred to as “Further Education (FE)” (typically for 16-18 year olds) and in the period of compulsory schooling up to 16 years. p.18)

日本においても1960年代に短期大学や四年制大学において観光関連学科が開設される。1963年には東洋大学短期大学部観光科が、1967年には立教大学社会学部観光学科が設立された(工藤 2015)。東洋大学、立教大学ともに先に開講された「ホテル講座」が発展して設立された学科であることから(工藤 前掲書)、ホテル事業の従事者を育成する目的

であったと考えられる。1980年に私立鹿児島城西高等学校に「ホテル観光科」が開設されたのを皮切りに、高校においても「観光産業の人材育成のための専門教育」(宍戸 2009, p.1)として観光教育が導入されるようになった。しかしながらリゾートブームが終焉し観光事業の失敗が相次ぐようになると、観光教育への期待も停滞する(宍戸 2006)。21世紀に入り長引く経済不況を乗り越える方策として再び観光に期待が寄せられ、政府は「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を実施するなど観光振興に力を入れ始めた(宍戸 2006)。観光への期待の高まりとともに、観光教育の対象も児童生徒へと拡大する。政府が児童生徒への観光教育の必要性について初めて触れたのは観光立国推進基本計画(国土交通省 2007)と見られる。「観光の振興に寄与する人材の育成」項目において次のように述べられている。

③ 地域の固有の文化、歴史等に関する知識の普及の促進

(学校における地域固有の文化、歴史等に関する教育の充実)

学校における地域固有の文化、歴史等に関する学習を進めることにより、次世代を担う子どもたちに対し観光に対する興味及び理解を早い段階から促す(国土交通省 2007, p.28)

「学校」や「子どもたち」という言葉から政府は「観光の振興に寄与する人材の育成」を初等中等教育段階から開始すべきと認識していると推測される。2007～2009年度には「児童・生徒によるボランティアガイド普及促進事業」を行うなど、政府が児童生徒への観光教育を推進するようになると、それに伴い研究も少しずつ増えていく。寺本は「公教育(特に社会や英語、国語、総合)の場において、広い意味での観光人材(観光知を備えた市民)の育成に関与すべき」(2017a, p.17)との考えから、全国各地の小学校で観光教育の出前授業を行った(2014; 2016a; 2017a; 2017b)。寺本による「観光知」とは旅をする、訪問客を受け入れるという観光の二大要素に必要とされる教養や能力をさす(2016a)。寺本(2016b)はまた高校においても出前授業を実施した。澤(2016a; 2017)は中学校の地理教科において観光をテーマにした学習を行うことを推進している。

3. 本研究の位置付け

本研究で着目する児童生徒による観光ガイドについて、寺本(2014, p.72)は「観光学と教育学の接点を考える際、もっとも端的な教育場面は児童生徒による観光ガイド体験である」とし、観光ガイドを実践的な観光教育としている。観光庁は児童・生徒によるボランティアガイドについて、次のような効果が期待されるとしている。

児童・生徒がボランティアガイドを行うことは、「旅をする心を育む」、「地域への理解を深め、郷土への愛情を育てる」、「早い年齢から社会性を身につける」などの教育的な効果を通じて、将来の観光地域づくりを担う人材の育成に貢献するものと期待される。

また、他地域から来訪する観光客へのおもてなしに携わることで、お客様に喜んでいただく満足感やガイドを行う楽しさを体感し、地域における観光や交流への興味を高めることが期待できる。(観光庁 2010, p.51)

「将来の観光地域づくりを担う人材の育成」という文言からは、「ブローカー(観光産業や観光行政機関等)」や「ホスト(観光地住民)」の育成、「地域における観光や交流への興味を高めることが期待できる」という文言からは「ゲスト(観光者)」の育成が目指されていると考えられる。したがって観光ガイド活動はブローカー、ホスト、ゲストというあらゆる観光関係者の育成に繋がる観光教育と位置付けることができる。

原・高野(2017)、西村・海津(2013)、佐々木(2014)は児童による観光ガイド活動について、澤(2016a)は中学生による観光ガイド活動について聞き取り調査を行った。ガイド活動に取り組んだ児童生徒にはコミュニケーション能力の向上が見られたとされる(原・高野 2017; 西村・海津 2013; 佐々木 2014; 澤 2016a)。観光庁(2010)は児童生徒によるボランティアガイドのモデル事業の実施主体による報告書を紹介している。英語による観光ガイドに取り組んだ高校生は「普段、学校で学んでいる英語により力を入れるようになった」(観光庁 2010, p.45)とされ、英語学習への意欲が向上したことが分かる。以上のことから児童生徒が英語による観光ガイド活動に取り組むことで、英語コミュニケーション能力が向上すると推測される。将来の観光事業従事者となるかもしれない存在である児童生徒の英語コミュニケーション能力の向上は、インバウンド観光で見られる、観光事業従事者と外国人観光客間のコミュニケーションがとれないという問題の改善に繋がると期待される。更に観光ガイド活動を通し外国人と交流することで、異文化理解も深まると考えられる。東(2016)が述べているように、外国人観光客を相手とする場合、異文化への意識を高めることが必要とされ、一住民である児童生徒の異文化理解の深化は住民の外国人観光客を受け入れる態度の形成に繋がるといえる。しかしながら児童生徒を対象とした観光教育の先行研究で英語コミュニケーション能力や異文化理解に着目したものは見られない。

森(2018)で調査した近野小学校・中学校では小学校5・6年生が日本語で、中学生が英語で語り部⁴活動に取り組んでいた⁵。中学校の指導担当教諭及び中学校生徒への聞き取りから、小学校の語り部活動で身に付けた観光資源に関する知識があったことで、英語語り部の台本の理解が容易に

なつたと分かつた。また教諭への聞取りから語り部活動への取組みを通し生徒の英語コミュニケーション能力が向上したと分かつたが、生徒への聞取りでは本能力の向上が確認できなかった。また異文化理解に関しては教諭・生徒両者から理解が深まつたと見られるナラティブは得られなかつた。しかしながら森（前掲書）の調査は指導担当教諭1名・生徒1名への聞取りであり、生徒の英語コミュニケーション能力の変化を見るのであれば複数の教諭及び生徒への聞取りまたは生徒へのアンケート調査を行い検討する必要がある。そこで本研究では森（前掲書）と同様に、児童生徒が英語による観光ガイド活動に取り組むことで英語コミュニケーション能力が向上するという仮説を立て、児童生徒を対象とした英語語り部養成講座を調査対象とし、講師2名への聞取り及び受講生へのアンケート調査を実施した。

Ⅲ. 調査対象、研究の方法及び各用語の定義

1. 調査対象について

調査対象の語り部ジュニア養成講座は和歌山県美浜町のNPO法人「日ノ岬・アメリカ村」により運営され、2018年度から講座が開始された。同町の三尾地区は1888年から太平洋戦争勃発の頃まで、カナダへ渡る多数の移民を輩出したことで知られている（東2018）。移民史について語ることでできる地域の人々が数少なくなり、次世代の英語による語り部を養成することを目的に開講された。元小学校教諭や国家通訳案内士、現役の中学校英語教諭といった幅広い背景をもつ講師たちが移民史とそれに関する英語を学ぶ授業を行っている。講師の中には北米出身の外国人も2名おり、彼らはそれぞれALTと同NPOが運営するレストランのスタッフである⁶。受講生は受講を希望した、同県日高郡の美浜町・日高川町及び御坊市⁷に住む小中高生17名である。内訳は小学5年生1名、中学1年生2名、2年生2名、3年生5名、高校1年生4名、2年生1名、3年生2名となっている⁸。毎週日曜日の13時～15時までの2時間、旧三尾小学校の教室で授業が行われ、1時間ずつ移民史と英語の授業が行われている。学年別で分けることなく、受講生全員が同じ授業を受ける。授業は座学（写真1）のほか、三尾地区内を歩いてガイドの練習をするフィールドワークや、夏休みには京都外国語大学の学生を迎えての合宿も実施された。更には、移民2世の方や移民史について研究している大学教授をゲストティーチャーとして授業に招くこともある。2018年10月には筆者と同研究室の留学生3名・日本人学生1名と、受講生との交流授業を実施した（写真2）。2019年度には受講生のカナダ派遣が決まっており、三尾地区からカナダへ渡った移民の子孫と交流する予定である。

調査対象に本講座を選んだ理由は、移民史について英語で語ることでできる語り部を養成しているという点で、活動を通しての英語コミュニケーション能力の変化を検討できること、そ

して移民史を学ぶことでカナダの歴史や文化について触れ、受講生の異文化理解の深化も期待されることである。



写真1 座学の模様



写真2 交流授業の模様

（写真1は2018年11月18日筆者撮影、写真2は2018年10月7日筆者撮影。）

2. 研究の方法

原・高野（2017）・西村・海津（2013）・佐々木（2014）と同様に、指導者への聞取りを実施した。受講生に対してはアンケート調査を実施した。受講生に対しアンケート調査を実施した理由は筆者が訪問しない授業であっても、筆者の代わりに講師に配布を依頼することができるため、より多くの受講生から回答を得られると考えた。原・高野（2017）は児童に聞取り調査を実施しているが、アンケートの回答を記述式にすることによって、聞取りと同様に受講生の意見を聴くことができるようにした。

また、筆者は2018年4月・6月・8月・9月・10月・11月の計6回、授業の参与観察を行っている。

3. 各用語の定義

本調査では受講生の英語コミュニケーション能力の変化を中心に分析するが、原・高野（2017）・観光庁（2010）で見られた地域に関する知識の習得や地域に対する誇りや愛情

の形成についても合わせて検討する。また、寺本（2014）・寺本他（2015）は外国人観光客を受け入れるうえで住民にはホスピタリティの保持が求められ、初等教育から育成されるべきとしていることから、本講座を通して受講生にホスピタリティが形成されているかも検討する。英語コミュニケーション能力、地域に関する知識、地域に対する誇りや愛情、そしてホスピタリティの定義については以下のとおりである。

英語コミュニケーション能力について、まずはコミュニケーション能力について定義する。金田一（2007,p.19）はコミュニケーション能力を他者とうまく関係をつくる「関係性の能力」としているが、観光客から好印象を持たれるのは住民から挨拶をされたり声をかけられたりといった些細な行為である（青木・安本・安村 2018）ことから、住民には観光客との関係性の構築までは求められていないと解された。したがって齋藤（2004）によるコミュニケーション能力⁹の定義、「意味を的確につかみ、感情を理解し合う力」（p.4）を採用する。ここでのコミュニケーションとは「意味や感情をやりとりする行為」（齋藤 前掲書 p.2）である。次に英語コミュニケーション能力を構成する要素について考えてみる。鳥飼（2013）は外国語でコミュニケーションを行う場合、異文化に関する知識と異文化を理解しようとする開かれた心が必須とする。また、藤田（2009, p.11）は異文化コミュニケーション力を「個人的な文化的アイデンティティーにまず「気づき」、その上で個々の多様性を理解し「尊重」し、異質を「受容」できる力」（p.11）としている。「自身の文化に気づいたうえで個々の多様性を尊重し相手の文化を受け入れて理解すること」を異文化理解とすれば、これは英語コミュニケーション能力を構成する一要素といえる。更に、大屋（2016）は外国人とコミュニケーションを図るうえで日本人に求められることは、「自分の意見をもち明確に表明する、かつ、「ウチ」向きだけではなく開放的な態度」（p.48）としている。つまり、外国人とのコミュニケーションに対する積極性も英語コミュニケーション能力に含まれるといえる。また、上述したように外国人を英語でガイドした高校生には、英語学習への意欲の向上が見られたとされ、観光事業の担い手となるかもしれない児童生徒が意欲を持って英語を学ぶことは、将来の観光事業従事者の英語コミュニケーション能力の向上に繋がりと考えられる。したがって英語コミュニケーション能力の変化を見るうえで、英語学習への意欲も考慮に入れることとする。

「地域に関する知識」及び「地域に対する誇りや愛情」に関して、ここでの地域は美浜町の地方創生事業であることから美浜町全域とする。また美浜町三尾地区の移民史についての語り部養成を目的としていることから、地域に関する知識とは移民史についての知識とする。

ホスピタリティについて、寺本（2016a, p.5）は「観光を通して培われるよりよい対人関係スキル（接遇の言葉・態度）や他者を受け入れる寛容心全般」としているが、前田（2007, p.7）では「他者を快く受け入れる精神であり、より具体的には、

「他者を歓待すること」を人間の価値ある行為として位置づける行動規範を称した抽象概念である」とされている。寺本、前田による定義から本稿ではホスピタリティを「他者を歓待すること」とする。更に、前田（前掲書）はホスピタリティが特定行為を意味せず、自発性と無償性という特徴を持ち、すべての人々が実践主体なりうるとし、本稿でもこれらをホスピタリティの成立する要件とする。

IV. 講師へのインタビュー調査

1. 調査概要

講師 A・B の計 2 名に半構造化インタビューを実施した。講師 A・B はそれぞれ歴史と英語の指導を担当している。聞き取り対象として 2 名を選んだ理由は A が本講座の主導者であること、B は英語の教科書（写真 3、4）を作成するなど英語の指導を主導していることである。なお、インタビュー調査の詳細については下記のとおりである。

表 1 インタビュー調査概要

整理番号	対象者	聞き取り日時	聞き取り場所
A	講座の主導者。歴史の指導を担当。元小学校教諭。	2018 年 9 月 9 日（日）16 時 15 分～16 時 50 分	カナダミュージアム（美浜町三尾 482）
B	英語の指導を担当し、教科書を作成。国家通訳案内士。	2018 年 10 月 7 日（日）10 時 30 分～11 時 25 分	いろはカフェ（御坊市湯川町小松原 366-27）



写真 3 教科書

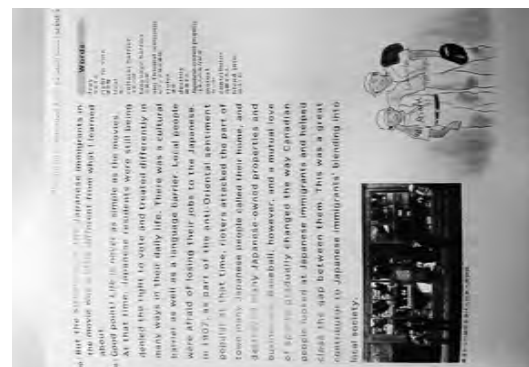


写真 4 教科書のページ一部

（写真 3、4 ともに 2019 年 3 月 4 日筆者撮影）

2. 調査結果

講師 2 名へのインタビュー調査の目的は、語り部講座に取り組んだ受講生に英語コミュニケーション能力の向上が見られたかを検討することである。また、合わせて地域に関する知識の習得、地域に対する誇りや愛情の形成、そしてホスピタリティが形成されているかも検討する。本目的に関連する質問項目は「語り部講座を通して受講生に学ばせたい、身に付けさせたいこと」、「語り部講座を通じての受講生の変化」、「小中高生が外国人観光客にできる「おもてなし¹⁰」についてどう考えるか」である。以下では A・B によるナラティブを 7 項目に分けて記述する。ナラティブはゴシック体で表し、付番している【1】【2】【3】・・・はナラティブの順番ではない。ナラティブの末尾にある (A) (B) とは発言者を指し、発言者のナラティブは方言等を修正せずそのまま使用している。ナラティブの中の下線や () は筆者が追記したものである。《再掲》とは同じナラティブを 2 度使用していることを意味している。

(1) 講師が語り部講座を通して受講生に身に付けさせたい能力・知識

【1】英語に慣れるっっちゃうことと、ある程度そういう、そのね、英語の壁を破って、まあかなり、好きになるっっちゃうことはまず大事やと思う (A)

【2】アメリカ村のこと移民のことで、そういうことへも興味ある子に育ててほしい (A)

【3】プレゼン能力までいきませんがもしもそういうところを、まあ私としては、ほか英語の担当の人もありますけど、私はそこらへんを、なんか、手助けできたらな、若干、そこらへんもちょっと、今後の課題かなあっちゃうんかね。思いますけどね。 (A)

【4】僕は、もうちょっと、声大きくとか、えー、プレゼン能力っちゃうんかね、そこらへんを、育てたいんですけども、ちょっと声が小さい、特に中学生、高校生になるとね、そういう、ちょっと日本の、高校生ちょっとぐーっと、なるんで、そこらへんをどう殻を、むいてあげられるかな、それは来年までの、課題。もちろん英語力もそうですけども、やっぱり、そういう、ばって声ね、声出して自分の意見を述べ、まあ、何人かいますけども、そういう、こう、まあ育てられたら、育てるのは難しいな、まだ今のとこ、ここ何か月かやってみて、難しい、どうしたら、もうちょっと殻を破れることができるかなっていう。とこかな、そこが難しいとこですね。 (A)

【5】英語を話すっていうことを、特別なものとして、もしくは、自分に全く関係のないものってたぶんみんな思ってると思うんですよね。思ってると思うんですよ。でも、意外とそうじゃなくって。あのう、どんだけ、じゃあ、どんだけできるようにならなしゃべれんみたいな、そんなもんじゃないっていうところを、もっと、自然に、なんやろ、触れるとこ

ろを感じてほしかったんですよね。 (B)

【6】文法どうこうって、今間違えたでしょとか、そんなことを誰も聞いてない。そうじゃなくって、これ何なんやろうっていうことを知りたいんやから、それを一生懸命伝えれば、伝わる英語でいいんやっていうのは、私が、まあ、身をもって、あのう、経験してきたことなんで。 (B)

【7】(三尾の移民について) 何か教えてもらったり、学ぶことの結果っていうのは、すぐには出てきへんってなったときに、やっぱりこれは、今分かってもらえんかもしれへんけど、やっぱり子供たちに、あのう、言っとかなあかんっていうのは、一つすごいあったんですよ。 (B)

【8】語り部、英語、三尾のことを置いといても、人前で何かを話すとか、ま、人前に出て何かをするっていうこと自体も、あのう、まあ、学ぶっていう言葉ではなく、慣れて、大丈夫になってくれたら、またそれはそれで、なんか、得られるものの一つかなって、うん、いうのがあって。だいた、あれですよ、あのう、慣れてきてくれるとは思います。 (B)

【1】～【3】は語り部講座を通して受講生に身に付けさせたい力について尋ねたときの、講師 A の回答である。「英語で話すことに慣れること」(【1】)や「三尾の移民に関心を持つこと」(【2】)とされている。【3】で言及されているプレゼンテーション能力(以下、プレゼン能力)について、【4】から講師 A によるプレゼン能力とは、人前で自分の考えを発言することであると読み取れる。

【5】～【8】は講師 B のナラティブである。講師 A が【1】で「英語に慣れる」と述べていたのと同様に、講師 B からも【5】で受講生の英語を話すことへの抵抗を無くすという目的が語られている。また、【6】では講師 B 自身のガイドの経験から、文法等にミスのない完璧な英語で話すことよりも、客が知りたいことを伝えることが重要としている。講師 B は「伝わるんやっていう、なんやろな、経験を持つきっかけ。」とも述べており、本講座を通して受講生に自身の英語が相手に伝わる経験をさせる目的があると伺える。【2】で講師 A は受講生に三尾の移民に関心を持たせたいとしていたが、講師 B にも【7】から三尾の移民について地域の子供たちに伝えておかなければならないという思いがあったことが分かる。【3】【4】で講師 A が人前で自分の考えを発言する力の向上に言及していたのと同様に、【8】で講師 B もガイドの練習を通じて人前で話すことに慣れさせたいとしている。

(2) 地域に関する知識、地域に対する誇りや愛情

【2】や【7】から講師 A・B ともに受講生に三尾の移民に関心を持たせたいという思いがあったことが分かるが、講師 A・B のナラティブで受講生の移民への関心の変化について言及したと見られるものは無かった。

(3) 外国人とのコミュニケーションに対する積極性

【9】 あんまそういう機会ないんちゃうかな。そんなに積極的じゃないと思いますけどね。(A)

【10】 違和感なく接せられると思うんですよ。まあもちろん、言葉通じないっていうんがありますけども、徐々にでもそういう、ALT きたりね、小学校 3 年生からもう、あの、英語、やっていますんで。(A)

【11】 今、ALTの先生が、あの、各学校にいてるっていう意味では、そういう意味では、あんまり、あのう、抵抗はないですね。(B)

【12】 掘り下げて、何か人間関係っていうとこにやっぱいかないんで。むしろ、なんやろな、慣れ過ぎて、慣れ過ぎて面白くない。面白くないじゃないですけど、それこそ、普通になってるじゃないんですけど、学校にはいてるけど、でも、ねえ、なんかもうちょっとこう、関わったら面白いのになっていうのは、正直私は思う。(B)

【9】 【10】 は受講生に限らず地域¹¹の子供たちが外国人とどのように接しているか尋ねたときの、講師 A の回答である。【9】で外国人と接する機会があまりないとされている。講師 A によれば地域で働いているアジア出身の外国人はいるが、地域を訪れる外国人観光客は見られないという。【9】 【10】で地域の子供たちは外国人と積極的に接することはないが、学校で ALT と関わっているため、違和感を感じることなく外国人と接することができるとしている。

【11】 【12】 は講師 B による、受講生と外国人講師との関わりについてである。上記の講師 A と同様に、【11】で受講生は学校で ALT と関わっているため、抵抗なく接することができるとする。【12】にあるように、講師 B は受講生により深く外国人講師と関わってもらいたいとしているが、これは普段外国人観光客をガイドする中で彼らから様々な考え方を聞くことができるからだとして述べていた。

(4) 英語学習への意欲

【13】 みんな、こんだけの、その、いろんなレベルの、あのう、ま、英語始めた子から、もうそれこそ、英検 2 級既に取りつる子までいてる中で、どうすんのよって話なんですけど、いや、いいや、みんなで教えっしながらやったらいいやと思って。(B)

【14】 すごいなって思う子が隣にいたら、そこまた刺激になるし。で、自分がかつて通ってきた道で、あんまりこう、分からん子が、みた、で教えてあげるってこともすごい勉強になるし、もうそれでいいやんっていうのがすごいあったんで。(B)

【15】 英語分からんっていう顔をしてる子もいてるんですよ。それでも、巻き込んで巻き込んでやっていくうちに、こう、じゃあ日本語の、あのう、キーワード出すの、僕やるから英語書いてよとか。でもその英語を書いてもらったものを、結局自分も読む羽目になるんでとかっていうのを、ま、サイクルが、こう。で、思ってる以上に、あのう、何て言うかな、引いてる子がいないんですよ。結構みんな参加してくれて。(B)

【1】や【5】 【6】 から講師 A・B ともに受講生に英語で話すことに慣れさせたいという思いがあったことが分かるが、講師 A のナラティブで受講生の英語学習への意欲の変化について言及したと見られるものは無かった。【13】で講師 B は受講生間で英語のレベルが異なることについて言及しているが、小学 5 年生から高校 3 年生までという受講生の学年の幅の広さを考えれば当然のことと考えられる。講座開始当初の講師 B が担当する英語の授業では、まずグループで三尾地区の移民や観光地について説明する文章を日本語で考え、それを英訳し、読む練習をする。次はガイドの実践練習で、三尾地区内を実際に歩き移民にまつわる箇所や観光地にて、受講生は作成した説明文を披露する。写真 5 は受講生の考えた「三尾の漁法」の説明文である。【13】や【14】にあるように、講師 B には英語の得意な者が苦手な者を教えるというねらいがあり、【15】から説明文の作成段階において英語の得意な者が苦手な者をサポートしていることが分かる。英語の得意な者が英語が分からないとしている者であっても出来ることを提案し、説明文の作成に関わらせようとしていると読み取れる(【15】)。2018 年 11 月の時点で、小学 5 年生 1 名と中学 1 年生 2 名は断続的ではあるが出席を維持していた。低学年が学習意欲を維持できていたのは、こうした高学年や英語の得意な者によるサポートがあったことも要因の一つと推測される。

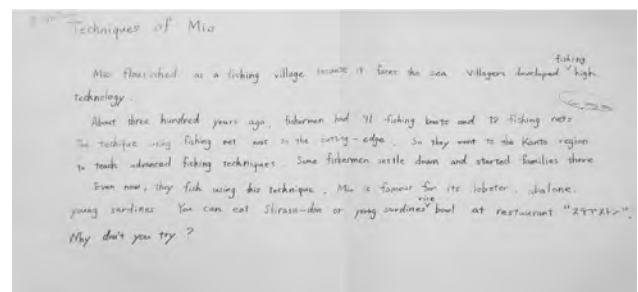


写真 5 「三尾の漁法」の説明文(2018年8月19日 筆者撮影。京都外国語大学の学生をガイドした際には、講師 B がこれを基にガイド用の説明文を作成し、受講生が披露した。)

(5) コミュニケーション能力

《再掲》【4】僕は、もうちょっと、声大きくとか、えー、プレゼン能力っちゃうんかな、そこらへんを、育てたいんですけども、ちょっと声が小さい、特に中学生、高校生になるとね、そういう、ちょっと日本の、高校生ちょっとぐーっと、なるんで、そこらへんをどう殻を、むいてあげられるかな、それは来年までの、課題。もちろん英語力もそうですけども、やっぱり、そういう、ばって声ね、声出して自分の意見を述べ、まあ、何人かいますけども、そういう、こう、まあ育てられたら、育てるのは難しいな、まだ今のところ、ここ何か月かやってみて、難しい、どうしたら、もうちょっと殻を破れることができるかなという。とこかな、そこが難しいところですね。(A)

《再掲》【8】語り部、英語、三尾のことを置いといても、人前で何かを話すとか、ま、人前に出て何かをするっていうこと自体も、あのう、まあ、学ぶって言葉ではなく、慣れて、大丈夫になってくれたら、またそれはそれで、なんか、得られるものの一つかなって、うん、いうのがあって。だいが、あれですね、あのう、慣れてきてくれてるとは思います。(B)

(1) で講師 A・B は人前で発言する力を身に付けさせたいとしていたが、【4】にあるように、講師 A は受講生の人前で発言する力の向上があまり見られず今後の課題としている。他方で講師 B は人前で話すことに慣れつつあるとし、講師によって受講生の評価が異なることが分かる。

(6) ホスピタリティ

【16】別に外国人であろうと、誰であろうと、とにかく、「上から目線にならない」っちゃうんかな。やっぱり、人として尊ぶっちゃうんか、相手を尊重するっちゃうんかな。そういう心が、まあ通じると思うし。だから、まあ、白人やから偉いとか、黒人やからとか、そういうんじゃないで、やっぱり人として、これはもう、中国人であれ韓国人であれ、やっぱりそういう人を尊重するっちゃうんかな。そういう心っちゃうんかね。僕はもう、子供たち、もちろん、そうです。だから、なんであれ、障害もった人であれ、なんであれ、お年寄り、みなそういう、ね、尊敬するっちゃうんかな。そういう、心で接する。まずそこから違うんかな。そういう心かなと思うんですけどね。(A)

【17】何でもかんでもすることが、で、実際、実際違うか、ま、してほしくないことをするのはおもてなしではないからっていうのは、まあ、ちょっと、まあ、ごめんなさい、前提に置いといてなんですけど。……自分が下にとか、あの、上にとかそういうものではなくって、やっぱ、相手の立場を知った上で、こう、うまく、何て言うかな、コミュニケーションですよね、を取れるような、それを感じられるような、まあ、うー

ん、それがおもてなしやと私は思ってるんで。どういう目的で来て何をしたいのか、どういうバックグラウンドで来てるか、どこに気を使ってあげなアカンのかとか。あのう、ま、それを、時にはお互いのこと、こうやって、こんな教え合いながら、あのう、じゃあ一緒に気持ち良く過ごすにはどんなふうにしたらいいんかとかっていうことを、こう、考えられるような、スキルって言い方は悪いんですけど、そういう、その、柔らかさを、こう、身に付けてほしいかなって思いますね。(B)

講師 A・B とともに受講生のホスピタリティの変化について語ったと見られるナラティブは無く、上記(【16】【17])は「小中高生が外国人観光客にできる「おもてなし」についてどう考えるか」に対する講師 A・B の回答である。【16】から講師 A がホスピタリティの育成については重視しておらず、子供たちの他者を尊重する心を育むことを重要視していることが分かる。【17】で講師 B はただ観光客をもてなすことがおもてなしではないとしたうえで、相手の立場や背景を理解し、それらに応じて対応できる力を重要視し、こうした力を受講生に身に付けてほしいと述べている。相手のことを考えて配慮することは本論におけるホスピタリティの意義に当てはまると考えられる。

(7) 異学年学習によるメリット・デメリット

(4) で高学年や英語の得意な者が苦手な者をフォローしていると分かったが、これは異学年学習によるメリットといえる。このフォローは受講生と留学生との交流授業の際にも見られた。交流授業では受講生が2, 3名ずつのグループに分かれ学生をガイドしたが、授業後の学生のコメントでは「恥じらう男の子は時々話せない時、パートナーは熱心的な手伝ってくれた。(単語の読み方が忘れた時、ヒントを与える)(原文ママ)(中国人留学生)」、「年下の子が説明でつまると、さりげなく年長の子がサポートする姿が、微笑ましかった。(日本人学生)」とされている。他方で本講座における異学年学習のデメリットとして、授業内容を高学年のレベルに合わせると低学年が理解できないことが挙げられる。講師 A は「(自身の授業について) 移民の歴史的なことを、ちょっと今日はばって、読んだだけですけどね。ちょっとね、(受講生の) 年齢差あるんで。なかなか分かってくれたか、ちょっと難しかったかもわかりませんけど。」と述べていた。写真6が当該授業で使用されていた資料であるが、「亜細亜人排斥協会」や「義勇兵」といった単語は小学生や中学1年生には難しいと見られる。

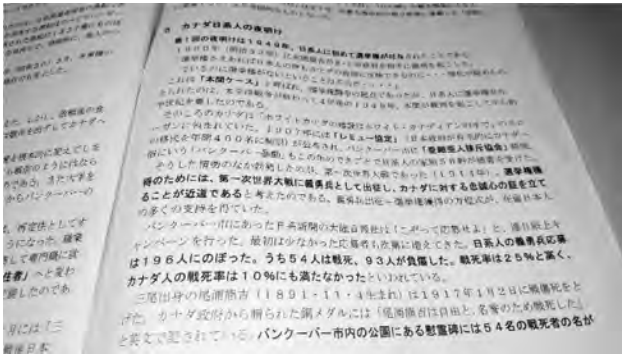


写真6 2018年9月9日実施授業で用いられた資料（2019年3月4日 筆者撮影）

V. 受講生へのアンケート調査

1. 調査概要

受講生の英語コミュニケーション能力や地域に対する誇りや愛情、そしてホスピタリティの形成について調査するため、2018年11月18日に受講生11名にアンケート用紙を配布した。配布しきれなかった分については講師A・Bに配布を依頼したが、何名の受講生に配布されたかは不明である。回収した中に筆者が配布していない受講生からの回答が1名分見られたので、少なくとも12名には配布されている。7名から回答を得ることができ、7名は配布日から2018年12月9日の間に回答した。2018年11月18日実施までの授業の平均出席者数は10.36人であった¹²ことから、平均出席者数の過半数から回答を得られたといえる。

2. 調査結果

各質問項目とそれに対する回答は下表2のとおりである。下表2は選択式で回答する箇所をみの集計であり、アンケートには各回答に対し理由などを尋ねた記述回答部分や自由に感想を記述する部分も設けた。表2以下は記述回答や感想から調査目的と関連する回答を抜き出して各項目ごとにまとめている。

表2 選択式回答 集計

質問項目	回答集計
1. 美浜町三尾のカナダ移民について学んで、カナダ移民や美浜町について、意識（考えや気持ち）は変わりましたか。	変わった……6名 変わらなかった……1名
2. 皆さんはこれまでの授業で、英語でガイド（案内）の経験をしました。8月の合宿では京都からきた大学生にスタンプラリーをしながら英語で各地を案内しました。10月には和歌山大学の留学生たちに英語で各地を案内しました。これらの経験を通して、初めて会う外国人と英語で話すことについて、意識は変わりましたか。	変わった……5名 変わらなかった……1名 1名は参加できなかったとし、無回答。
3. (2. 斜体部分と同じ) これらのガイドをしたときに、お客さん（大学生や留学生）のことを考えて、気をつけたことはありましたか。	あった……5名 なかった……1名 1名は参加できなかったとし、無回答。

(1) 地域に関する知識、地域に対する誇りや愛情

地域に関する知識について、「カナダでは、日本人はたくさんはたらいても、カナダの人たちの1/3以下であることを知り、かわいそうだった（美浜町の三尾地区以外の出身）」という記述があり、移民とカナダ人との所得格差を指していると見られ、移民に関する知識が培われていると伺える。

地域に対する誇りや愛情とまでは言えないが、活動を通して三尾地区の移民への関心が高まっていると見られる記述はいくつかあった。「もっとカナダ移民や美浜町について知りたかった」と思った、興味が湧いた。（中3女子・県外出身）、「英語を実用的に使うために この教室に参加しましたが、歴史がとても深くて、移民にも興味を持つようになりました。（高1女子・日高川町出身）、「歴史の授業は、カナダの移民について学び、難しいこともありますが、自分が理解したことに興味が高まります。（原文ママ）（美浜町の三尾地区以外の出身）」である。更に「移民を始めとする三尾の素敵な歴史も私にはとても魅力的で、美浜町民ではありませんが、日高地方の人間として地元を誇りに思います。（中3女子・御坊市）」という記述からは、移民史の学習を通して美浜町・御坊市を含む日高地方を誇りに思う気持ちが芽生えていると分かる。

質問1で「変わらなかった」とした1名は三尾地区の出身で、その理由を「何年か住んでいるから。」としている。同様に三尾地区の出身で「変わった」とした者は、「三尾とカナダとは、少しつながりがあるくらいだと思っていたけど、思っていたより、つながりが強くて、こんなに身近にあるんだと感じた。」と述べ、同地区で育った者であっても知らなかったことを活動を通して学んだことが伺える。

(2) 外国人とのコミュニケーションに対する積極性

外国人とのコミュニケーションに対する積極性が向上したと見られる記述は無かったが、外国人と接触することに楽しさを見出している記述がいくつか見受けられた。例を挙げると、「多くの外国の方と話す機会があり、その中で私は外国の方のフレンドリーさに助けられ、更には、私にもわかる英語で話して下さるなどの気遣い・優しさなどに触れ、緊張よりも楽しさが勝るというように最近に変化してきました。（中3女子・御坊市）、「完ぺきに英語ができていないとガイドが出来ないと思っていたけど、短い文や表情、表現だけでも、理解してくれて、外国人と話すことが楽しく感じるようになった。（中3女子・三尾地区）」という記述である。同2名は「ネイティブな方とこれほど交流できる環境に出会えたのは初めてです。（中3女子・御坊市）」、「外国の人たちが来て話したりすることはなかなかないことだと思うので、とても良い経験になっていると思います。（中3女子・三尾地区）」と述べており、学校でALTの指導を受けることはあっても、外国人と密接に関わる機会があまり無かったと見られる。先述のよ

うに受講生は講座の中で外国人講師や留学生3名と交流している。他方で、質問項目2で「変わらなかった」とした1名がそのように回答した理由は「今までに、何回も外国の人と話したことがあったから。(高1女子・美浜町の三尾以外の地域)」で、高校等で関わる機会があったと推測される。

(3) 英語学習への意欲

ガイドの練習をきっかけとして英語だけでなく三尾地区の移民に関しての学習意欲が向上したと見られる記述があり、「ツアーガイドの練習をした時に、わからない質問をされた時はちょっとあせりました。なのでそれがあってから、三尾の事についてもっと知りたいと思えたり、英語でわかりやすい説明をしたいという目標もできました。(中3女子・県外)」とされている。また、「移民について英語を使って学べるので、とても力がつきます。実際にカナダに行って学ぶプロジェクトが来年あるので、それまでに移民やカナダについて英語を使って説明できるようになりたいです。(高1女子・日高川町)」という記述からは、移民を題材とした英語の授業によって移民と英語の両方の学びを深めていること、また、2019年度に予定されているカナダ派遣が受講生の移民・英語の両方の学習意欲を高めていると伺える。講師B作成の教科書(「Food for Thought」)に関する記述もあり、「Food for Thoughtを読むのは、けっこう難しいです。しかし、少しずつ読めるようになってきました。(美浜町の三尾地区以外)」とされ、リーディング力の向上を受講生自身が感じているようである。

(4) コミュニケーション能力

質問項目2で「意識が変わった」とした受講生の記述部分において、「英語で話す時に、相手にもっと伝わりやすいようにするコツや相手が嫌な気持ちにならないようにするにはどう表現したらいいのかなど考えるようになった。(中3女子・県外)」とされていた。当該受講生はもとも英会話を得意とし、英語で話す機会を求めて本講座に参加したという。既に高い英会話スキルを持っていた受講生がガイド活動への取り組みを通して、相手に応じてどのような英語表現が適切であるか考えるようになったとし、コミュニケーション能力を向上させていると見ることができる。また、講師A・Bともに人前で発言する力を身に付けさせたいとしていたが、受講生の記述に「まだまだ上手にガイドを出来ないけど、初めてした時よりは笑顔に出来ていると思います。(中3女子・三尾地区)」とあり、ガイドを他者の前で話すことと捉えれば、人前で話すことに慣れつつあると読み取れる。

(5) ホスピタリティ

質問項目3のガイドを行った際に配慮した点に関する記述からは、客を楽しませよう、退屈させないようにしようとする意欲が見られた。「笑顔で話すということを気をつけた。(中3女

子・県外)」、「沈黙が続かないよう、ガイドするにあたって必要な補足情報を話したり、三尾に限らず、外国の方を案内する場合は日本文化という大きなテーマで話題を作ったりした。一方で、こちら側が話し続けるのではなく、言葉のキャッチボールも意識した。(つまり、お客さんに楽しんでいただけるような環境を提供するというのを第一に考えていた。)(中3女子・御坊市)」、「なるべく、相手の質問に答え、話がとぎれないように心がけた。(美浜町の三尾以外の地域)」と述べられている。記述から受講生が自発的に行った配慮と見られ、自発性と無償性というホスピタリティの要件が満たされているといえる。したがって、ガイド活動を通して受講生にホスピタリティが形成されつつあると推測される。

(6) 異学年学習によるメリット・デメリット

Ⅳにおいて講師2名のナラティブから推測された異学年学習によるメリット・デメリットをそれぞれ、受講生間のサポートが行われることと、授業内容を高学年のレベルに合わせると低学年が理解できないこととした。受講生のアンケートからもこのことが見られた。まずメリットについてであるが、「参加している生徒は小学生から高校生までの幅広い年齢のため、お互いにサポートしあう点ではとても良い形です。(中3女子・御坊市)」という記述があり、受講生間のサポートがなされていることが分かる。また、「学年のかべがあまりない体験は、数少なく、良い体験である。(高1女子・美浜町の三尾以外の地域)」という記述もあり、高学年は低学年との交流を貴重なものと捉えているようである。対して、低学年からは「習っていないことばかりでよく分からないことが多い。(中1男子・三尾地区)」という記述が見られた。講師Aが危惧していたとおり、低学年の中には講座の内容が学校の授業で習っていないものが多く、あまり理解できていない者がいると分かる。

Ⅵ. 結果のまとめ

1. 英語コミュニケーション能力

英語コミュニケーション能力についてはコミュニケーション能力に加え、外国人とのコミュニケーションに対する積極性、英語学習への意欲、異文化理解に着目して検討した。

まずコミュニケーション能力に関し、受講生へのアンケートでガイド活動への取り組みを通して適切な英語表現について考えるようになったという記述があり、コミュニケーション能力を向上させていると見ることができた。また、講師A・Bともに人前で発言する力を身に付けさせたいとし、受講生の記述で他者を前にしてガイドすることに慣れつつあると読み取れるもの、更に「先生方も私たちにチャレンジできる場をいくつもつくって下さり、それらの経験を重ねることが私の自信にもつながっています。(中3女子・御坊市)」という記述もあり、講座を通して人前で話すことに限らずあらゆることに通ずる自信をつけていると見られた。

次に外国人とのコミュニケーションに対する積極性について、講師 A・B のナラティブから受講生は違和感なく外国人と接することはできるが、自ら積極的に関わろうとはしていないと伺えた。また、受講生が違和感なく外国人と接することができるのは、講座の成果ではなく、学校で ALT と関わっているためとされている。受講生へのアンケートにおいても外国人とのコミュニケーションに対する積極性の向上は見られなかったが、受講生は講座を通して外国人との交流に楽しさを見出していると分かった。

英語学習への意欲については、受講生へのアンケートでガイドを行ったことによって移民と英語の双方に対する学習意欲が向上したと見られる記述があり、これは移民について英語で語ることのできる語部を養成する本講座であるからこそ得られた教育効果といえる。更に 2019 年度のカナダ派遣も、受講生の移民と英語を学ぶ意欲を向上させていると伺えた。英語学習への意欲と関連して、講師 A・B は英語で話すことに慣れさせたいとしていた。受講生へのアンケートで「完璧に英語ができていないとガイドが出来ないと思っていたけど、短い文や表情、表現だけでも、理解してくれて、外国人と話すことが楽しく感じるようになった。(中3女子・三尾地区)」という記述があった。講師 B は文法等にミスがあったとしても、相手に自身の英語が伝わる経験をさせたいとし、この記述から講師 B が期待する経験を受講生が積んでいると見ることができる。

他方で講師 B によるナラティブ（【12】）であったように、受講生へのアンケートにおいても異文化理解を深めていると見られる記述は無かった。これはアンケートの質問項目も一因であろう。

2. 地域に関する知識の習得、地域に対する誇り及びホスピタリティの形成

講師への聞き取りでは受講生の地域に関する知識の習得について言及されなかったが、受講生の記述には移民に関する知識を身に付けていると見られるものがあった。また講師 A・B は三尾の移民に関心を持たせたいとし、受講生からは関心を持ったとする記述がいくつか見られ、更には美浜町を含む日高地方を誇りに思うとする記述もあった。受講生のホスピタリティの育成について、講師 A は重視していなかったが、受講生の記述では笑顔で話す、会話が途切れないようにするといった配慮をしたと述べられていた。更に受講生の記述の中には外国人をガイドする際には日本文化というテーマで話題を作ったとしているものもあり、講師 B が重要視していた相手の背景を理解したうえでそれに応じて対応する力を身に付けつつあると見られる。したがってガイド活動を通して受講生にはホスピタリティが形成されつつあると見ることができる。

3. 異学年学習のメリット・デメリット

異学年学習のメリットは英語の得意な者が英語が分からないとしている者をグループワークに関わらせようとするといった受講生によるサポートが行われることであり、このことは講師 B のナラティブ及び受講生のアンケートの記述においても見られた。対して、デメリットに関しても講師 A への聞き取り及び受講生のアンケートで見られ、それは授業内容が低学年にとって学校で習っていないことが多く、理解できないことである。デメリットは授業の進め方に一因があると推測される。森（2018）で調査した近野中学校の生徒は英語語部を実践していたが、これは小学校で取り組んだ日本語による語部活動が基礎となっていた。対して、本講座では日本語による語部への取り組みを経ずに、英語語部に挑戦している。低学年の感想（「習っていないことばかりでよく分からないことが多い。」）は学校で習っていない移民史と英語を両方同時に学ぶことから書かれたと推測される。講座の進め方として、まずは日本語による語部の習得から始めると、低学年にとってより理解しやすかったのではないだろうか。学習方法に関しては、近野小学校の取り組みが参考になる。近野小の児童はプロの語部の語りをそのまま使用するのではなく、児童自身が分からなかった箇所について調べ、自身が理解できる範囲の台本を作成していた。筆者が参加した講師 A の授業では、2 回とも講師 A が説明するのみで受講生が課題に取り組む場面は無かった。講師 A による資料を用いて、低学年が分からなかった箇所を高学年と一緒に調べるなど、受講生が主体的に取り組む場面を設定し、難しい内容であっても低学年が理解できるようにする工夫が必要と考えられる。

VII. おわりに

本稿ではインバウンド観光で見られる、観光事業従事者と外国人観光客間のコミュニケーションがとれないという問題の改善、また外国人観光客を受け入れるうえで住民に必要とされる異文化理解の深化に繋がるのではないかと考えたのもと、児童生徒を対象とする観光教育に着目し、英語による観光ガイド活動に取り組むことで彼らの英語コミュニケーション能力が向上し異文化理解も深まるという仮説を立て調査を実施した。講師への聞き取り及び受講生へのアンケートを実施し検討した結果、異文化理解の深化は見られなかったものの、受講生は外国人との交流に楽しさを見出していると分かり、また、ガイドの練習を通して英語への学習意欲が向上していると見られ、英語コミュニケーション能力が向上しつつあると考えられた。本調査で見られなかった受講生の異文化理解の深化に関しては、2019 年度に予定されているカナダ派遣で受講生が異文化に直接触れ、理解が深まると期待される。

今後の活動の展開として、同 NPO 法人が運営するミュージアムやレストランを訪れる客を受講生がガイドするというのも考えられるが、児童生徒による観光ガイド活動を観光振興のみを

目的として運営するようになってはならない。西村・海津（2013, p.68）は「児童らによるボランティアガイドが奉仕の強制にならないよう学校関係者や保護者が状況を十分に把握し、コントロールし、児童らの成長を支えていく必要がある」と指摘している。指導者や運営者は観光ガイド活動には児童生徒への「教育」の役割があることを留意しておく必要がある。

今後の研究として、継続して参与観察を行うほか、再び講師への聞き取り及び受講生へアンケート調査を行うことで本調査結果と比較ができ、英語コミュニケーション能力や異文化理解がどのように変化しているか見ることができるであろう。

注

- 1 観光事業と観光産業について、前田勇〔編著〕（2010）『現代観光総論』では次のように説明されている。観光事業とは「観光の意義あるいはその効果に着目して、観光という現象を促進させようとする一連の活動であり、その担い手は、営利を目的として観光者を対象とする民間企業と、政府や地方自治体などの公的機関である」（p.13）。例として旅行業、出版業、小売業が挙げられる（p.180, 表 18-1）。観光産業とは「個々の観光事業を包括したもの」（p.178）である。本論ではこの区別に従って各用語を用いている。
- 2 学校教育法に即し、小学生を児童、中学生・高校生を生徒としている。
- 3 観光者とは観光客を指す。
- 4 近野小中学校は学校近辺にある熊野古道の語り部活動に取り組んでいる。大澤・江本（2006, p.68）は熊野古道の語り部について「歴史や地域の文化等を観光客に伝えることが語り部の主要な業務となっている。いわゆる「ガイド」としての性格が基本」としており、本稿はこの意義で「語り部」を用いている。
（大澤健・江本みのる（2006）「世界遺産地域における「語り部」の現状と今後の課題」『研究年報』第 10 号、67-108 頁）
- 5 以下、近野小学校・中学校に関する記述は森（2018）を参考にしている。
- 6 移民史、英語それぞれ 3 名の講師がおり交替で授業を行っている。外国人講師が授業を行うこともある。その他授業をサポートするスタッフもいる。外国人講師は 2019 年 3 月に ALT の 1 名のみとなった。
- 7 日高郡は御坊市と合わせて日高地方と呼ばれる。
- 8 いずれも 2018 年度の学年である。
- 9 齋藤（2004）は「コミュニケーション力」としているが、デジタル大辞泉によると、「力」には「学問・技芸などの能力。力量。実力」という意味があるため、「力」には能力という意味も含まれていることから、能力としている。
- 10 ホスピタリティに関して、筆者は「おもてなし」と尋ねているが、長尾・梅室（2012, p.128）はホスピタリティとおもてなしの違いについて次のように述べている。「同じ客人を歓待することをあらわす語であっても、ホスピタリティが物質的、精神的な行為に重きを置いているのに対し、おもてなしは行為と並んで行為の背景にある精神性に重きを置く概念である」。概念が重視する対象は異なるが客人を歓待するという意義は共通している。したがって本論では同義として扱っている。
（長尾有記・梅室博行（2012）「おもてなしを構成する要因の体系化と評価ツールの開発」『日本経営工学会論文誌』第 63 巻 3 号、126-137 頁）
- 11 ここでの地域は美浜町に限らず、御坊市も含まれている。
- 12 出席表を基に筆者が算出した。2018 年 4 月 15 日～2018 年 11 月 18 日まで授業は合計 28 回実施されている。8 月 18 日・19 日に実施された合宿は 2 回とカウントしている。

【参考文献】

- Airey, D. (2005). Growth and Development. In D. Airey, & J. Tribe, *An International Handbook of Tourism Education* (pp. 13-24). Oxford, UK: Elsevier.
- 青木義英・安本幸博・安村克己（2018）「観光まちづくりにおける「ホスピタリティ」概念の再考」『観光学』19 号、51-56 頁
- 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（2016）「明日の日本を支える観光ビジョン—世界が訪れたい日本へ—」
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/pdf/honbun.pdf
2019 年 1 月 17 日 閲覧
- デービッド・アトキンソン（2017）「「マナーの悪い外国人観光客」を冷静に考える」
<https://toyokeizai.net/articles/-/186506?page=2>
2019 年 1 月 17 日 閲覧
- 藤田玲子（2009）「観光立国ジャパン—異文化コミュニケーション力に関する一考察—」『コミュニケーション科学』30 号、3-14 頁
- Go, F. M. (2005). Globalisation and emerging tourism education issues. In F. W. Theobald, *Global Tourism* (pp. 482-509). Oxford, UK: Butterworth Heinemann.
- 原香葉子・高野雅夫（2017）「小学校と連携した着地型観光が地域づくりに与える影響の考察—よそ者としての旅行会社と小学校教員の役割—」『第 32 回日本観光研究学会全国大会学術論文集』、269-272 頁
- 東悦子（2016）「観光と異文化間コミュニケーション」大橋昭一・山田良治・神田孝治〔編著〕『ここからはじめる観光学』ナカニシヤ出版、202-208 頁
- 東悦子（2018）「移民と和歌山」和歌山県国際交流センター 平成 30 年度 6 月グローバルセミナー配布資料
- Jafari, J., & J.R.B. Ritchie. (1981). Toward a framework for tourism education: Problems and prospects. *Annals Of Tourism Research*, 8(1), 13-34.
- 観光庁（2010）「児童・生徒によるボランティアガイド普及促進事業報告書」
<http://www.mlit.go.jp/common/000139413.pdf>
2018 年 12 月 2 日 閲覧
- 観光庁（2017）「「訪日外国人旅行者の国内における受入環境整備に関するアンケート」結果」
<http://www.mlit.go.jp/common/001171594.pdf>
2019 年 1 月 17 日 閲覧
- 金田一秀穂（2007）「絵筆のように言葉を使おう」『16 歳の教科書』講談社、13-42 頁
- 国土交通省（2007）「観光立国推進基本計画」
http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha07/01/010629_3/01.pdf
2018 年 12 月 2 日 閲覧
- 工藤泰子（2015）「我が国の観光教育機関についての史的研究—2 つの東京オリンピックと教育機関設立を中心に—」『日本国際観光学会論文誌』第 22 号、13-20 頁
- 前田勇（2007）『現代観光とホスピタリティ—サービス理論からのアプローチ—』学文社
- 森さえか（2018）「インバウンド観光に対応する観光教育についての考察—和歌山県における小中学生による観光ガイド活動の事例を通して—」平成 30 年度和歌山大学大学院観光学研究科修士論文
- 日本政府観光局（JNTO）（2019）「訪日外客数（2018 年 12 月および年間推計値）」
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/190116_monthly.pdf
2019 年 3 月 11 日 閲覧
- 西村千尋・海津ゆりえ（2013）「観光地域づくりを教材とした学校教育の

- 可能性-三重県鳥羽市菅島の島っ子ガイドを事例に-」『第28回日本観光研究学会全国大会学術論文集』、65-68頁
- 大屋幸恵 (2016) 「グローバル時代における日本人の対人コミュニケーション」大屋幸恵・内藤暁子・石森大知 [編著] 『文化とコミュニケーション』北樹出版、32-50頁
- 齋藤孝 (2004) 『コミュニケーション力』岩波書店
- 佐々木真理子 (2014) 「初等教育における観光教育の現状について-観光交流の視点から見た観光教育の事例-」『第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集』、121-124頁
- 澤達大 (2017) 「中学校における観光教育の実践-校外授業と日本の諸地域学習-」『地理』11月号、24-31頁
- 穴戸学 (2006) 「観光教育の拡大と多様化を考える-観光教育とは何か」『地理』6月号、28-35頁
- 穴戸学 (2009) 「高等学校の総合的な学習の時間における観光教育のカリキュラム研究」『科学研究費補助金成果報告書』
- 寺本潔 (2014) 「教育学の視点」大澤昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治 [編著] 『観光学ガイドブック 新しい知的領野への旅立ち』ナカニシヤ出版、70-75頁
- 寺本潔・中嶋真美・曾山毅・中村哲・小林亮 (2015) 「小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究-沖縄県を事例に-」『玉川大学学術研究所紀要』第21号、1-18頁
- 寺本潔・澤達大 [編著] (2016a) 『観光教育への招待-社会科から地域人材育成まで-』ミネルヴァ書房
- 寺本潔 (2016b) 「観光の教育力と教材開発による人材育成-那覇国際高校 (SGH) への出前授業を通して-」『論叢 玉川大学教育学部紀要』、101-116頁
- 寺本潔 (2017a) 「小学校における観光授業-出前授業の実践から-」『地理』11月号、17-23頁
- 寺本潔 (2017b) 「社会科・観光学習を通して島の発展につながる人材育成-沖縄県石垣島の小学6年生への出前授業と中学生観光シンポジウムを振り返って-」『論叢 玉川大学教育学部紀要』、37-56頁
- 徳久球雄・安村克己 [編纂] (2001) 『観光教育 観光の発展を支える観光教育とは』くんぷる
- 鳥飼玖美子 (2013) 「英語コミュニケーション能力は測れるか」大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子 [著] 『英語教育、迫り来る破綻』ひつじ書房、83-116頁
- 山田良治 (2016) 「観光学と観光教育」大橋昭一・山田良治・神田孝治 [編著] 『ここからはじめる観光学』ナカニシヤ出版、17-26頁
- 安村克己 (2010) 「観光と教育・福祉」前田勇 [編著] 『現代観光総論』学文社、145-154頁

受理日 2019年6月7日